















魔王軍対人類の戦は、魔王軍の勝利に終わった。  
人類は魔王の支配下に置かれ、人類の城も魔王軍に乗っ取られた。  
魔王は人間界一広大な城に国中の女を集め奴隷とし、ハーレム生活を送っている。

これは、そんな魔王のムフフな1日に密着した作品である。

魔王の1日は、朝食から始まる。しかし、魔王たるもの、ありきたりの食事方法は取らない。



せっかくたくさんの雌の奴隷がいるので、  
奴隷を活用して最大限に楽しむのだ。

ちなみに、魔物が人間を食べるというのは、  
人間側の勝手な迷信であり、  
雄しか生まれえない魔物にとって、  
人類の雌は繁殖のための貴重な奴隷である。





母乳が出る奴隷を選び、母乳をジョッキに生搾り。  
他の奴隷は皿代わりに女体盛りにして、  
直に口をつけて食べる。



この奴隷たちはすでに発情しているように  
見えるが、それもそのはず、  
魔王の絶大な精力は、近くにいる女たちを  
強制的に欲情させてしまうのだ。



「んふううううっ♥」

なめただけで何度もイくので、愛液がソース代わりに食材にからむ。じっくりと食事を味わうので、奴隷は小一時間ほどイキ続けることになる。



「ふおおおっ♥」

また、巨躯の魔王ののどを潤す母乳の量はジョッキ一杯では足りず、母乳奴隷も潮を吹き続けながら、大量の母乳を搾乳されるのだ。

朝食を取った後は、魔王としての執務が始まる。  
最初の執務は、下々の魔物と謁見し、要望を聞くことだ。  
その際、魔王としての威信を見せつけることも必要になる。  
例えば、所有している雌奴隷の数などだ。  
そのため、この玉座は奴隷でかたどられており、謁見のための部屋にも、  
相当数の奴隷を侍らせている。



そして、さらに権力を誇示するために、魔王は自らの精力で玉座の奴隷たちを発情させ、魔物たちに見せつけるのだ。謁見は午前中いっぱい行われるので、奴隷たちはその間中ずっとイキながら、魔王の巨体を支え続けなければならない。もし崩れてしまった場合、魔王の威信を傷つけたとして命がなくなるので、奴隷たちも必死だ。この女体玉座は交代制になっており、選ばれた奴隷しかできない花形でもある。奴隷たちも本望だろう。ちなみに、座り心地はどんなクッションよりも快適だという。



ニム

いよあやあ、!!!

グッ  
グッ  
グッ

グッ

グッ

グッ  
グッ  
グッ

グッ  
グッ  
グッ

グッ

グッ

ブル

ブル



午前中の執務がひと段落すると、人間だろうが魔王だろうが、催すのが尿意だ。しかし、魔王たるもの、普通の便器になど放尿しない。専用の雌奴隷が、文字通り肉便器となってその尿を口で受け止めるのだ。

しかし、近づいただけで発情してしまう魔王の尿を飲むとなると、当然この雌奴隷もタダで済むはずがない。



### 「んぐうっ♥」

まずは一物をくわえさせるが、奴隷はこれだけで興奮し、身体をよじる。これからどんな快感が襲うかをよく理解しているからだ。

しかし、魔王に反抗などできるはずがない。諦めて尿を飲むしか生きる道はないのだ。



「んんん ~っ♥」

尿を飲んだ奴隷は、興奮のあまりオナニーをせずにはいられない。身体がうずいて、誰に見られていようと、辱められようと、手を止めることができなくなるのだ。



「おほおおおおっ♥ あ〜っ♥ イクイクうっ♥  
とっ、止まらにやいいっ♥ やめたいのにいっ♥  
手が動いちゃううっ♥」

このオナニーショーは、  
半日ほどぶっ続けで行われる。  
その間この女奴隷は、謁見に来た魔物や、  
城で働く魔物たちの好奇の的となり、  
馬鹿にされ、嘲笑われながらも  
オナニーを続けることしかできない。

そして、ようやく発情が静まった夕方には、  
再び魔王が訪れ、尿を飲ませるのだ。

この奴隷が1日の中で休めるのは、  
イキすぎて失神した間だけの、  
ほんの数時間である。

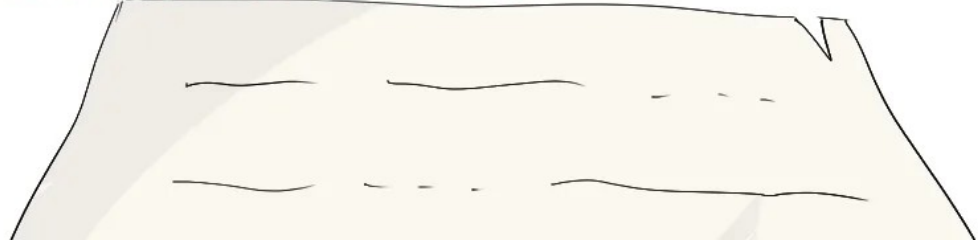


午後の執務時間には、書類仕事が待っている。  
魔物と言っても、昨今ではかなり文明的で煩雑な手続きを行っている。  
といっても、魔王の仕事は、内容を読んでサインをするだけなのだが。



かつては、奴隷の血を使った血の盟約が交わされていたこともあった。  
しかし、現在では、貴重な奴隷の身体を損なわないよう、奴隷の愛液で  
サインするように簡略化されている。

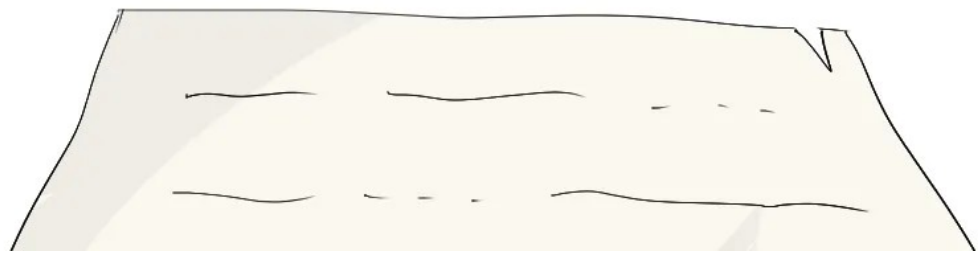
この奴隷は、王家の血を引く元騎士の奴隷なので、血統としては  
盟約を結ぶのにそん色はない。



愛液を取る方法はいたって簡単で、  
奴隷の股をちょっと筆でくすぐるだけでいい。  
「くっ…んっ…！ や、やめろっ、貴様っ！」



魔王の近くにいるだけでも発情してしまうので、  
特に必死に弄らなくても、奴隷は簡単に絶頂に達してしまうのだ。



しかし、王家の先祖は勇者であり、王家の血につながるものは、多少なりとも魔王の魔力や精力に抵抗する素質を持っている。この生意気な奴隷も、少し愛液の出が弱いようだ。



「汚らわしい魔族めっ！！ 私に触るなっ！！」

しかし、今日はサインすべき書類が山積みなので、少々面倒だが、さらに楽しませてやらなければならないらしい。魔王は、キツいま〇こに筆を押し込んだ。



「おほおおおおっ♥」



少し抜き差しするとすぐに愛液が噴き出してくる。 粹がっていても、しよせんはただの奴隷に過ぎないのだ。

「くほおっ♥ ひやめろおっ♥ こ、殺せえっ♥」



サインが終わるまで、何度も愛液を取らねばならず、この奴隷は無様に潮を吹きながら、イキ狂わされていたとか。



書類仕事も終わると、魔王は部屋を出る。  
今度は城下町に出て、下々の様子を見に行かねばならないのだ。  
しかし、その途中の廊下に、かつての敵だった勇者一行が展示されているのを見つける。  
魔王に逆らった人間の、当然の末路だ。



特に、勇者は二度と魔王に逆らったりできないよう、身体に淫紋を刻まれ、快楽を全てコントロールされている。

勇者一行は、見せしめのために、  
1時間ごとに玩具や淫紋で辱められ、  
絶え間ない絶頂を与えられる。

特に勇者は、通常の100倍以上の快楽を  
淫紋によって叩き込まれ、  
触らなくとも潮を吹いてイキ続け  
なくてはならない。



「おっ♡ おっ♡  
おっ♡  
やらっ♡ らめええっ♡」



勇者を喚かせて気晴らしをした後、魔王は城下町へとくり出す。  
しかし、魔王たるもの、自分の足で歩いている姿を民に見せたりはしない。  
もちろん、奴隷に乗るのだ。  
やわな奴隷ではすぐにへたばってしまうので、  
奴隷は必ず元兵士の中から選ばれる。  
元兵士間の結束は固く、仲間の命を盾にすれば必死に命令に従う所も、  
扱いやすさの特徴だ。



とはいえ、かなり体格差がある上に、魔王のそばにいる雌奴隷は発情してしまうので、そばには替えの奴隷を何頭か用意しておかなければならない。そうでないと、城下を回り切れずに戻らなくてはならなくなるからだ。

この、奴隷の馬をたくさん引き連れた魔王の行列は、城下町の風物詩とも言え、城下の魔物たちからも人気の行事となっている。



魔王は、奴隷の足があまりに遅いと、鞭で打つ代わりに尻尾でま〇こを犯し、奴隷を急がせる。

「お`うっ♡ お`♡ おごっ♡ お`っ♡  
まっへっ♡ ありゆきまふっ♡ らめっ♡ イグっ♡ おうおお♡」

潮を吹きながら歩く奴隷の後には濡れた道が残り、魔王の目が城下に届いていることを、目に見える形で魔物たちに伝えるのだ。



今まで見てきたのは、魔王直近の奴隷たちだが、それ以外の奴隷活用法も少しだけ見てみよう。



魔物たちのペットや家畜と言える生物が、  
触手やスライムである。  
その繁殖にも、女奴隷は欠かせない。

触手やスライムの繁殖部屋に放り込まれた奴隷たちは、まず体を拘束される。



そして、体内に子種となる精子を大量に注ぎ込まれるのだ。腹がふくれるほど注がれても、精液の中の鎮痛成分によって、奴隷が痛みを感じることはない。



そして出産がさらに進むと、奴隷たちの全身を触手やスライムが覆い、口を塞いで空気や栄養を送り込み、生殺与奪を支配下に置いてしまう。



奴隷たちは、魔族が解放しない限り、このまま種付けと出産のループを無限に繰り返され、栄養として母乳も搾られながら、苗床としての人生を送ることになる。この状態から奴隷が自力で脱出することは不可能だが、苗床になった奴隷自身も解放は望まない事だろう。

長かった魔王としての執務が終わると、魔王にも休息の時間が訪れる。  
夕食を女体盛りで食べた後は、入浴だ。  
しかし、魔王たるもの、自分で体を洗ったりはしない。  
そういう雑事は、全て奴隷の仕事なのだ。



胸の大きい奴隷を選び、  
身体中を絹のように滑らかなおっぱいで洗わせる。  
皆従順な奴隷ばかりなので、魔王にとっても至福の癒される時間だ。



そしてもちろん、魔王ち○ぽも念入りに洗わせる。  
しかし、効率的に洗うなら、やはり挿入してしまった方が簡単だ。  
献身的な奴隷がち○ぽに跨り、自らのま○こを使って洗い始める。  
しかし、これがなかなか重労働で、魔王はご褒美に中出しをしてやる  
こともある。



「んほおおおっ♥」

膣に魔王の精液を受けた奴隷は、魔王の力により、絶対服従する。以後決して逆らわず、魔王を喜ばせるためだけに生きようになる。そして、再び精液を中出ししてもらうために、必死に魔王に媚び、奉仕するのだ。



この魔王の身体を洗う女奴隷は全て、魔王の精液を中出しされ、完全服従している奴隷たちなのだった。 7

魔王のベッドは、もちろん女体で作られている。  
この女体ベッドは最上級の柔らかさで、一晩体を預けるに相応しい。  
翌日には、新たに最高の状態の奴隷が選ばれ、新たなベッドが作られる。



奴隷たちは、どれだけ重くても、痛くても、魔王の眠りを妨げないように、声をあげてはならない。マットレスとして魔王の全体重を受け止め、一晩を過ごさなくてはならないのだ。

そしてもちろん、魔王のお楽しみは、この女体ベッドだけではない。ベッドですることと言えばひとつ。

ズ  
ニ  
ツ



子作りをして、魔王の子を孕ませるのだ。  
選ばれた優秀な肉体の奴隷を、存分に犯して中出しする。  
「ひあああああっ♡」



毎晩最低でも奴隷1人を妊娠させ、数えきれないほどの子孫を残すのだ。  
そして、最も優秀なものを一人選び出し、王座を譲る。  
そうでなければ、他の魔物に王座を奪われてしまう恐れもあるからだ。  
だからこそ、子作りには手加減がない。

「おほおおおっ♡ お腹破れますっ♡ もっ、もう入らないっ♡  
中までいっぱいなのにつ♡ これ以上はっ♡ いやあああっ♡♡」  
確実に妊娠する量を注ぎ込むまで、子作りセックスは続く。



子作りが終わるころには、この奴隷も魔王に絶対服従になり、魔王の子を  
を生き育てるために、生涯を捧げたくなくなるに違いない。  
こうして、奴隷に囲まれた魔王のムフフな1日が終わるのだった。